

●海外引揚者が語り継ぐ労苦

母よ！あなたは強かった！

母よ！ あなたは強かった！

神奈川県 小林 正明

はじめに

私は昭和十三年（一九三八）年、北朝鮮の海州（北朝鮮南西部の都市）で父、幸雄と母、春の次男として生まれた。父は幼いころに両親に連れられて渡鮮し、小学校、中学校を京城（ソウル）で終えて、東京の大学を卒業すると再び京城に戻り、交通業界に就職して、終戦時には株式会社黄海自動車の専務の職にあった。東京生まれの母は、神奈川女子師範学校を卒業後、神奈川や東京で小学校の教師をしていたが、縁あって朝鮮にいた父のもとに嫁いだ。

終戦になると、海州はソ連軍の支配するところとなったので、両親は九歳の兄を頭として一歳の弟まで四人の子供を連れて命からがら南に逃れたのだが、その苦労は並大抵なものではなかったようだ。母はその苦労を丹念に綴り、『吾子よ、これが祖国の大地だ』という題名で一冊の本にまとめ、自費出版をした。母の記録と、私の記憶をもとにして引揚苦労をまとめて、負け戦のもたらした悲惨極まらない実態を、現代の多くの人々に知ってもらい、平和というものがいかに有り難いことであるかを

認識してもらえれば、母もどんなにか喜ぶであろうと思ひ、ペンを取ったのである。

一 終戦前後

昭和二十年、当時私は満七歳、最後の国民学校一年生であった。校門に近づくと、上級生の号令で歩調を高くとり、奉安殿の前では最敬礼をしていた。三年生だった兄は、上級生たちと一緒に松根油掘りに駆り出されていた。友だち同士の遊びといえ、帽子の底の位置を変えて戦艦、潜水艦、駆逐艦などに変身して競い合う、「軍艦ごっこ」に熱中しているような軍国少年だった。

内地ではアメリカのB29爆撃機による連日連夜にわたる空襲があり、戦局は日ごとに悪化していたが、海州では遙か上空に敵機の飛行機雲がたまに見えるくらいで、空襲も無く、毎日の食べ物にも不自由したことはなかった。

そのころ我が家には、海軍の兵隊たちがよく滞在していた。軍務の間の休暇に、民間の家庭で休息するということで、今風に言くと、さしずめ「週末ホームステイ」ということだったのだろう。掃海艇の乗組員とか、戦闘機のパイロットとか、入れ代わり立ち代わりに来て、私たち兄弟をかわいがってくれた。

戦場に飛び立つ日の朝に、我が家の上空を旋回し翼を繰り返し振りながら飛び去った飛行機の姿を、今もはっきりと記憶している。「おばさんの家の上で、あいさつするからきつと見ていてね!」と、母に約束していたそうだ。彼らの多くは帰らぬ人となったが、九死に一生を得て帰還し、内地に戻っ

た後も交流が続いた人が、わずかだが存在している。

八月十五日、終戦の日のことは私はよく覚えていないが、母の記録によると、その日父は会社で軍の指令により、空襲に備えてバスを目立たない木陰などに移動させていた。その途中で玉音放送があり、一同整列して耳を澄まして聞いた結果、驚天動地の敗戦を知らされたのである。

父は、バス会社の運営は公共の仕事であり、休むことは市民の足を奪うことになるので、平常通り業務を続けるべきだと考えて社員に指示した。朝鮮人が多数を占める社員たちも了解し、とりあえず平常運行は保たれていた。しかし数日のうちに、日本人経営の会社が次々と朝鮮人によって接収された。道庁などの役所も日本人職員は追放され、警察は真っ先に乗っ取られ保安隊と名称を変えて、朝鮮人が日本人を取り締まるようになった。

父は、横暴な保安隊に会社が接収されて交通秩序が破壊されるのを防ぐために、自分が育てた幹部社員に事業経営のすべてを引き継がせ、運営の権利を譲り渡すことにした。朝鮮人幹部には日本の大卒出身者も数人いて、きつとうまくやるだろうと考えたうえでの決心だった。そして自分の最後の仕事として、社員一同に経営交代のけじめということで退職金を支給することにしたが、海州の銀行支店では資金調達ができないために、父は専用車のフォードを飛ばして京城に向かった。

京城は、まだ朝鮮人の反逆もなく比較的に平穏で資金調達もできたが、しかし海州に戻るのには既に至難の様相となっていて、保安隊の検問で大金が発見されれば、たちどころに没収されてしまう。父

が運ぼうとしていたのは、当時の金で約五十万円、今だと一億円をはるかに超える金額である。そこで父は一計を巡らした。車のトランクやシートの中とか、発見されそうな場所には小額の金を隠し、大金はアセチレンガスのタンクに入れて、そのまわりに野菜を山ほど積み込んだ。そして、走行中は朝鮮人の運転手一人に見せかけて、自分は後部座席の下に身を潜め、検問所が近づくところりと下車し田んぼの畦道あぜみちなどを遠回りして、検問所を通過した後でまた車に乗るといようにして海州に戻った。小額の見せ金はすべて奪われたが、退職金は無事で、九月の某日に予定どおり支給し、朝鮮における経営者としての最後の仕事を終えた。朝鮮人社員によって組織された黄海旅客自動車株式会社会員会に経営を引き継いだが、委員会の会長は、朝鮮人社員の投票によって選出されたそうである。そのころ既に日本憲兵隊は、隊長以下家族を含めた全員がそろって内地に帰っていた。父も親しい将校から一刻も早く逃げるように勧められたが、自分の責任感から受け入れなかった。そのため家族一同は、引揚げの辛酸をなめることとなったのだが、実直で真面目で、しかも責任感旺盛な父を、私は尊敬し誇りに思っている。

そして数日後、いよいよソ連兵の出現となる。

二 ソ連兵襲来

ある朝父が外出している間に、我が家はソ連兵の襲来を受けた。ロシア語らしいどなり声に母が玄関に出てみると、大男のソ連兵数人とその手先らしい朝鮮人一人が、威圧するように胸をそらして立

っている。赤ん坊を抱いたまま立ちすくむ母に向かつて、ソ連兵は大きな身振りをしてがなり立てるが、こっちに分かるはずもない。すると手先の朝鮮人が、「金を全部出せ、そして今すぐにここから出て行け。この家は大きくて明るく良い家なので隊長の住宅にする」と言っている」と通訳した。母は、必死の思いを込めてこの男に懇願し説得していた。「外出中の夫が帰つて来たら相談して、すぐにでも移転するからしばらく待つて欲しい。数時間でいいから、この兵隊をよそに連れ出してくれたら恩にきます。お礼もします。お願いです!」と、頭を下げていた。母の願いが通じたのか、通訳の朝鮮人は洩るソ連兵を何とかだめて連れ出してくれた。ほっと胸をなでおろす暇もなく、母はすぐ裏の社宅の辻さんの家に駆け込んだ。

辻さんは残務整理のため出張中だったので、奥さんに今しがたの出来事を話し、臨時の同居をお願いして、すぐに引越しに取りかかった。食糧、鍋釜食器、衣類に布団毛布などを私たちも一緒になつて懸命に運んでいるうちに、父が外出から帰つて来た。一瞬、呆然とした父も事情を知り、氣を取り直して、大きな物を運び出し、日暮れ近くに引越しを完了した。こうして私たちは、多くの思い出の残る我が家を去った。この家に再び住むことはなかった。

その夜遅く、家族六人が寝ていた八畳の座敷で、ただならぬ物音に母が目覚めた。「ドサッ! ドサッ! ドサッ!」という不気味な足音が近づいて来る。ぐっすり眠っている父を揺り起こして、「ソ連兵の足音よ! それも大勢よ!」と言った。状況を察した父は、二つ折りにした布団に座って両

ポケットに見せ金を入れた。母も布団を畳み、赤ん坊を抱きしめて夫婦で身構えた。足音は玄関前で止まり、ガラス戸をがたがたと揺すっている。開かぬと分かると裏口に回った。裏口は簡単に開いて、大勢が侵入して来た様子だ。「いよいよ来たぞ!」と、家族はそれぞれ目を見交わして覚悟した。私たちの前に現れたのは、身の丈六尺余りの大男で、典型的なソ連人の兵隊だった。ただ一人のっそりと現れたその男に、父は用意していた見せ金を渡すと、ひったくるように取り上げて自分のポケットに押し込みながら何かわめくが、さっぱり分からない。そのうちに、ほかの兵隊たちがどかどか入って来て父の両腕をつかみ、無理矢理に奥の部屋に引きずり込んで、襖をピシャリと閉じてしまった。ボスとも思われる大男が、ただ一人残っていた。危険を感じた母は、赤ん坊を横に放り出して私たち三人の子供を引き起こして、「みんな! お母さんのそばから離れないで、お母さんを取り巻いて守って!」と言って再び赤ん坊を抱きしめ、九歳、七歳、五歳の三人兄弟を母にしがみつかせて、ソ連兵を必死でにらみすえていた。しかしソ連兵は動じずに、母に対して横になれというような仕草をしている。首を振り、死にもの狂いで抵抗した母に対して、その男は母の頬を一尺もありそうな拳銃で殴りつけ、えり首を引きつかんだ。「絶対にいやだ!」と必死になって抵抗した母は、障子をけり破って隣の部屋に逃れようとした。するとそこに、長襦袢（えびすだて）と腰巻き一枚のかっこうで身を潜めていた、この家の辻夫人の姿が明かりに身をさらした。それを見たソ連兵は気が変わり、母を離して辻夫人の方に向かい、障子を閉めて明かりを消した。「助かった」と安堵しながらも、申し訳なきに胸が張り

裂けそうな母の耳に、「堪こゝろえて下さい！ 南無阿弥陀あみだあ。堪こゝろえて下さい！ 南無阿弥陀あみだあ」と唱える
辻夫人の声が聞こえてきた。

ところが、それからほんの数分も経たぬうちに障子が開いてソ連兵が現れ、辻夫人が明かりをつけた。なぜか慄然とした面持ちのソ連兵は、母をジロリと見ただけで、父が押し込められている奥の部屋に入って、何やら大声でわめいた。数分後にぞろぞろとソ連兵が部屋から出て来たが、どれもこれも大風呂敷にいっぱい獲物を入れ、よたよたとよろめくほどに重たそうにして、担いだり抱えたり提げたりして、大男のボスを先頭に「ドサッ！ ドサッ！ ドサッ！」と独特の足音を立てながら去って行った。

後で分かったことだが、台所から簡単に侵入したのは鍵がかかっていたいなかったからで、辻さんの十七歳になる娘さんがソ連兵の気配を感じて、とっさに台所口から庭の唐黍畑トウモロコシに身を隠したが、台所口はそのままになっていたからだった。

それにしても、母と辻夫人が危機一髪で助かったのはなぜか。その理由は辻夫人の話から推察できた。「私、お経を一生懸命に唱えていたので助かったけど、電気が消されて大きな毛むくじやらの手で、私の胸をなで回されたときの恐ろしかったこと。でも途中で私の体を突き放して部屋を出て行ったから、すぐに電気をつけて着物を着てモンペをはいたんです。仏様のお陰で助かりました。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏！」と興奮状態で話した。

このことも後で分かったのだが、当時ソ連兵は肺結核を極端に恐れていて、感染する不治の病と認識していたらしい。辻夫人は若かったが、病身のため非常にやせていて、「ブリキの湯たんぼ」の如き胸であった。暗闇の中で、あばら骨の浮き出た胸をなでたボスは驚き、この結核の巣から早々に退散したらしい。母は辻夫人の洗濯板の胸に感謝した。

母たちが危難に遭っている間、父は奥の部屋でソ連兵に囲まれ拳銃で脅かされていた。家族の危機を感じ胸の張り裂ける思いだったが、どうすることもできず実に悔しかったという。

その後、海州の町では昼夜を問わずピストルが鳴り、強盗、暴行事件は絶えず、昼間でも女は独り歩きできないような状態が続いた。このころから、朝鮮人の家には門柱や玄関などに「カレスキー」とロシア語で書いた白板が掲示されるようになった。白板の無いのが日本人の家だから、侵入して金品強奪や暴行をしてもよい、という意味を持った表示板なのである。

当時、海州にいた狼藉部隊ろうぜきぶたいは、極悪非道の囚人を狩り集めて日本向けに編成された無頼漢の集団である、と噂されていた。この連中が初めのうちは日本人、朝鮮人の区別無しに荒らし回ったので、被害を受けた朝鮮人側からの申し入れを受けたソ連軍が、対策として生み出したのが「カレスキー」の表札であった。こうなると哀れなのは日本人である。半ば公認で、抵抗もできず奪われる、犯されるのなすがままだった。中には勝手に表札を作り、玄関に取り付けた日本人もあったそうだ。

このような日々の繰り返し、日本人会から連絡があつて、日本婦人の貞操を守るため「私たち

が犠牲になり、ソ連兵に身体を提供しよう」と、元接客の商売をしていた婦人たちから申し出があったこと、その尊い志に対して、感謝の意を込めて彼女たちに役立つ物を進呈して欲しいと書き添えてあった。母は、ソ連兵に持ち去られた物の残品の中から、一番上等な錦紗縮緬きんしゃちりめんの外出着や帯、帯留めなどを日本人会に届けた。その後も泥棒の被害は続いたが、日本婦人への暴行沙汰は非常に少なくなり、海州在住の女性たちの多くが、慰安婦と呼ばれた彼女たちの犠牲によって救われたのであった。

ソ連軍の憲兵が進駐してきたのは、慰安婦問題からしばらく後のことであった。自動小銃を肩から斜めに担いで颯爽さつそうと歩く姿は、いかにも頼もしげな印象だったと母は言っていた。そして彼ら憲兵の進駐と同時に、市内の小高い丘の斜面一帯がソ連兵の墓地に早変わりした。百本余りの粗末な十字架が、雨後の筍たけのこのように突然現れたが、軍規違反の非道な行動をしていた、ならず者の兵士たちが処刑されたといううわさだが、本当だったのか。約一カ月に及ぶ長い間、思う存分強奪、暴行の限りをやらせておいて、その後処罰するとは……。だが、うわさの通り、死刑囚の狩り集めが前線部隊ならば、この十字架はソ連軍の予定の行動なのかもしれないと、父や母は釈然としない思いを抱いたという。

一応、憲兵により治安は回復したが、夜九時以降は外出禁止で、違反者は銃殺されるというまだまだ物騒な状況の中で、父のもとの会社の日本人社員の家族たちが父を頼って集まって来た。みんな夫が召集されたり戦死したりした母子家庭である。我が家を加えると二十人を超す大所帯となり、とて

も小さな社宅には住めないで、父は八方手を尽くしてもっと大きな家を探して全員で引っ越した。そのころから母は、二期期になっても学校へ行けない子供たちを集めて自宅教育を始めた。内地に帰ったとき、一年遅れになったりしないようにと願うてのことである。一年、二年、三年とそれぞれ学年が違う複式学級だから結構大変だったらしいが、そこは昔取った杵柄、元小学校教師の経歴は伊達ではなかった。

翌昭和二十一年の四月に引き揚げた兄と私は、内地の小学校に二、三学期不登校のまま編入したが、なんの不都合もなくトップクラスの成績を維持できたのもこのお陰である。

九月半ばを過ぎたころから、ソ連軍より日本人会を通じて、復員兵や成人男子に作業命令が出るようになり、父も駆り出された。飛行場の草取り、ソ連軍住宅の便所汲み取りなど、会社重役であった父には情けない作業であった。特に、海州駅での米や塩の袋をシベリアに向かう貨車に積み込む仕事には、実に悔しい思いをした。このころ物価は日毎に上昇し、収入が無いうえ暴徒に金品を奪われた日本人は食糧に不自由し、高粱の粥などでのいでいたからである。作業の労賃として支給される一日約五合の米は、食糧調達に頭を悩ます母にとって誠に有り難い物であった。

当時、北朝鮮にいた日本軍は既に武装解除され、ほとんどがシベリアに送られていたため、父たち日本人男性は都合の良い労働者として、その後もソ連軍の仕事を続けさせられた。その間、「もうすぐ引揚げが始まる」とか、「いやそれは十一月十五日のソ連革命記念日が終わってからだ」とか、「引

揚げなどはまったくなくて、餓死するまで放っておくつもりだ」とか、さまざまなうわさが流れたのだが、正式の連絡はいっこうになく、確実なのは作業命令の通達だけであつた。

三 第一次脱出

そして十一月になつた。相変わらず引揚げ日程の通知は無く、食糧事情はますます厳しくなつていった。

そのような中である日、遠方の作業に送られた人たちが帰つて来ないという事件が起こつた。朝六時に弁当を持って、「行つて来るよ」と軽い気持ちで出掛けたまま、何の音沙汰も無いのである。実は、シベリアに送られたのだと分かつたのは、数日後のことであつた。

否応なしに作業に駆り出され、その背後にはソ連軍の拳銃が待ち構え、作業―抑留になるかもしれない。しかも収入は絶たれ、食糧事情はますます厳しくなってくる。ソ連軍の公式通達などは当てにせず、脱出を図る人たちが次第に増えてきたのは当然の成り行きだろう。

まず最初は身寄りの無い独身者たち、次いで子供の無い身軽な夫妻が次々と脱出したが、今や子供や年寄り連れの家族も必死の脱出を決行するようになってきた。

そんな状況にあつたある夜中に、船頭だと名乗る一人の朝鮮人が密かに我が家を訪れて来て、ある知人からの手紙を父に手渡した。その知人は商店主で、以前に我が家に來た際に、「自分たち夫婦には子供も無いし、早いとこ逃げ出すことにします。もしうまく逃げられたら手紙を書いて船頭に持た

せますから、折り返しその男の船に乗って南朝鮮の仁川港に来るように。彼は信用のできる男ですから心配はいりません」と話して別れたことがあった。

船頭だというその男は、「数日中にまた来ますので、早く考えを決めておいてください」と言い残して去った。父と母は相談した。この手紙は私たちの家族だけを対象にしたものである。しかし現実には、父を頼って身を寄せている二十二人の人々が苦労を共にしているのだ。自分たちだけ密かに逃げるなどできない。父と母は覚悟を決めた。かつて社員のために最後まで責任を果たそうとした父の生き方通りに、全員で脱出することにしたのだ。しかしそれは容易なことではない。四、五人単位の人数だからこそ密かに脱出できるのであつて、二十人以上の集団で、しかも女子供がほとんどなのだから、後にして思えば無謀な企てだったのかもしれないが、当時は希望に満ちた話であつた。父と母は実行に移した。

父は仁川に向かう船の出発場所の確認や安全、金銭の配慮など脱出情報の収集、検討に全力を尽くした。母は、ひたすら家族が身一つで持つて行ける物、着て行く物、隠して持つて行く現金、その他の必要品をどう整理、決定するかに頭を悩ませた。母の背中では、まず赤ん坊という大事な荷物が占領していた。片腕におしめや肌着などの袋、もう片腕にはお握りや飴あめなど、二日分くらいの食べ物を詰め込んだ袋。七歳の私と九歳の兄のリュックサックには、厳寒の真冬に備えるためのセーターや着替え、記念の写真類などのほか、母の袋に入らなかつた残りの菓子などが詰められた。父の大きなリュ

ツクサツクには、内地に帰ってから必要な背広やセーター、できるだけ金に変えられそうな上等な着物類を中心に、薬や包帯なども入れることにした。そして肝心な現金をどう隠し持つて行くか、これが最大の問題であった。まず父や子供たちの着て行く洋服の袖付や脇の縫い目など、隠せそうな部分すべてに百円、二百円を縫い込んだ。当時の最高額紙幣である。母の衣類にも縫い込んだ。モンペの下に締めた帯の中にも、揉んで柔らかくした札を芯にして丸め込んだ。これで脱出準備完了。一緒に逃げるほかの家族たちも、それぞれ知恵を絞って荷物をまとめ、来るべき日に備えた。

数日後の夜更け、例の船頭が再度訪れたときには、彼を迎えた部屋は一緒に脱出する予定の全家族で超満員となっていた。驚いて言葉もない船頭に、事情を話し頼み込む。しかし彼は頭を抱えるようにして考え込んでしまった。無理もない。人数が増えるほど発見されやすく、成功率が低くなる。もし失敗すれば、自分の身にも危険が及ぶのだから。

「主人は戦地に出掛け、子供連れでこのままじつとしていたら、私たちは飢え死にするしかありません。何卒助けてください」などと、皆それぞれ必死で頼み込んで返事を待った。「分かりました。やってみましょう」との返事に、みんなは互いに手を取り合い、飛び上がらんばかりにして喜んだ。今までの厳しい生活と、いよいよおさらばだ。

母の記憶によれば、運賃は赤ん坊を除いて確か一人千円だったという。「出発の二日前、夜七時に荷物を取りに来ますから、身に着けて行く物以外の物を全部まとめて^{かます}呟に詰め、すぐ出せるようにし

すっかりくっついておいてください。私が責任を持って皆さんを仁川までお送りします」との頼もしい言葉に、皆喜びと期待で胸を膨らませてそれぞれの部屋に戻った。

十二月十二日夜七時、約束通り船頭が来た。外に止めた牛車に、用意されたみんなの臥を積み上げてロープで締め、他人の目に止まることなく密かに闇の中に消えた。もう後には引けない。荷物が行つてしまったのだ。二日後には決行するのだ。

昭和二十年十二月十四日。いよいよ脱出の日がきた。目立たないように父と私と弟、そして母と兄の二組に分かれて出発。それぞれリュックサックを背負い鞆を提げ、母は背中に赤ん坊を背負った。既に夕闇に包まれた午後四時過ぎ、いてついた道を母の組が先行し、三百メートルぐらい後ろから父と私の組が港の方向へ歩いて行つた。一緒に逃げるほかの家族もそれぞれ別々に分かれて、打ち合わせた場所へと向かっているはずだ。待ち合わせ地点は、通りから離れた松林を抜けてしばらく行つた海岸の砂浜である。

私たち家族が浜辺に着いたときには、浜辺にはだれの姿も見えなかった。「集合時間は七時だから、そろそろなんだがな」と父は時計を見たが、しばらく待つてもだれも現れない。「いったいみんなどうしたんだろう?」。約束の時間より刻々と遅れていく。焦りと不安で胸を締め付けられながら、さらに待っていると、遠くの方で懐中電灯らしい光が見え、人声が聞こえてきた。脱走する仲間のはずはない。しかし、身を隠そうにも草むら一つない浜辺のことだ。砂地に身を伏せて息を潜めている私

たちに足音は近づき、ついに懷中電灯の光に照らされてしまった。「こらあつ！ 何してるんだ。逃げるつもりなのか！ この野郎！」と、口々にののしられた。「そうです。逃げるところです」と言つて、仕方なく悄然と立ち上がり、父が答えた。「逃げるのはお前たちだけか？」と聞かれて、「そうだ」と答えた瞬間に、父は平手打ちにあつてよろめいた。母も頬を打たれて父の背後に逃げた。「パシッ！ パシッ！」と打たれ続けたが、父は足を踏ん張り毅然と耐えていた。「このうそつき野郎！ ほかの連中は全部捕まっている。主犯は小林というやつで、自分たちはついて来ただけだと白状してるんだぞ。馬鹿めが！」と、悔しくもまた情けない思いで小突かれながら、父母はどこかへ連行されて行つた。そして残された私たち兄弟は、しばらく歩かされた。そのうちに十数人の人影の列が見えてきた。一緒に逃げるはずだった人たちである。皆うつむいて黙り込んでいる。

それぞれ別々の道を進んでいたほかの組も、はじめの間は適当に距離を置いて歩いていたらしいのだが、心細さにいつしかひと固まりになり、途中の部落のそばを通つたときに見付かつてしまったのだという。「我が家族でさえ二手に分かれて行つたのに！」と、一瞬怒りに似た感情が走つた。「全員、一列に並べ！ これから保安署に連行する」。彼らは拳銃や抜き身の刀を提げた者、丸太ん棒を振りまわす者など皆威丈高で、それは凄まじい剣幕である。

捕らわれの身となつた私たち一同は、まさに「屠殺所に引かれる羊の群れ」のように暗い道をとぼとぼと歩き、小一時間後にやっと保安署に着いた。真夜中だというのに、通された部屋は明々と電灯

がつき、数知れぬほどの男たちが右往左往している。父や母もそこにいた。広いコンクリート造りのその部屋の正面には、日本統治時代には見たこともない奇妙な国旗が張られている。私たちは全員、固く冷たいコンクリートの床に座らせられた。「有り金、宝石を全部吐き出せ！　ぐずぐずするな、さつきとしろ！　食料品は出さなくてもいい！　持っていて出さんやつが見付かったら、どんな目に遭うか見せてやろうか！」と言って、一人の男が父を起立させて、往復ビンタを繰り返す。恐怖にそのいた一同は、それぞれ現金や貴重品を差し出した。母も見せ金として用意していたお札を、財布を空にして見せて渡した。出さなくてもいいと言われた食料品、握り飯や天婦羅の中に隠したお金を差し出す人、草履の鼻緒をわざわざ破いて出す人もいた。脱走者の手の内をみんな披露してしまつては、後に続く同胞のためにまずいことになるのではと母は残念に思い、衣服の中に縫い込んだお札は断固隠し通すことにした。

男たちは身体検査を始めた。ポケットを探り、下着や腹巻きの中、靴の底など金を隠しそうな場所を片っ端から調べていく。哀れだったのは、一人いた年頃の娘さんだった。胸を開かれ、中に手を入れられて執拗にいじりまわされた。一人が終わると次の男がまた同じことを繰り返す。何といやらしいことをするのだと、私は子供心にも憤りを感じていた。

しばらくするうちに一人の男が現れて、「子供たちに罪はない。コンクリートは冷たいだろうから、畳を運んで座れるようにしてやる。これは保安署長の計らいである」と叫んだ。恐怖と寒さに震

えていたみんながほっとすると、「責任者のお前は別だ。こっちへ来い」と、父だけが奥の方に連れ去られてしまった。何枚かの畳が運び込まれ、疲れと寒さに立つことさえやつとだったみんなは、倒れ込むようにして座った。そのとき、「哀号！ 哀号！」と大声で泣きわめきながら、一人の若い朝鮮人が二人の保安隊員に引きずられるようにして、通路のコンクリートに転がされるのが見えた。赤い腕章をした隊員たちが、殴る、蹴る、踏みつけるなど乱暴の限りを尽くしてその若い男を責めつけた。「この男は私たちを手引きした船頭の手下で、船頭は逃げて捕まらなかったの、その行方を白状しろと責められているのです」と、朝鮮語が分かるTさんが母にささやいた。私たちみんなが捕らわれたことにより、荷を積み込んで出港するばかりになっていた船が発見され、すべて没収されてしまったというわけだ。いくら責められても、彼はただ雇われただけで何も知らない様子で、問責はそのうち終わったが、私たちは気が気ではない。父があのように責められているのではないかと心配しているうちに疲れが出て、私たち子供はいつしか眠ったが、母は一晚中まんじりとしなかったぞうだ。

翌朝何時ごろだったか、四十歳前後と見られる男がみんなの前に現れた。「皆さん！ 私はこの保安署長です。急いで隣の部屋にある、船から運んだ荷物から大切な物を自分のリュックサックに詰めて、持てるだけ持って海州に引き返してください。これは私の特別の計らいです。さあ、だれも来ないうちに急いで！ 私は見なかったことにしますから。さあ、早く早く！」。一同夢のような、

狐につままれたような気持ちながら、荷物をまとめて慌ただしく出発した。帰っても私たちの住む家はない。しかも父がどうなっているのかも分からない。不安いっぱいの重い気持ちで、海州の町はずれにたどり着いた。

母はその近くに親しい友達が住んでいたのを思い出した。幸いそのNさんは未だ脱出せず在宅で、私たちはしばらくの間そこにお世話になることになった。しかし、父のことが心配でたまらない。あのまま海岸の保安署に捕われているのだろうか。

数日経ったある日、小学校三年生だった兄が提案した。「僕が保安署に行つて来る。お父さんがどうしているのか見てくる！」。母もまわりも皆心配したが、小さい子供の方がひどい目には遭わないかもしれないと考えて、お握りを持たせて往復六里の道を送り出した。

その日の夕方、一同が首を長くして待っていると、疲れた様子も見せずに兄が戻つて来た。「『何しに来た？』って言われたから『お父さんに会わせてください』と言ったら、『こんなチビなのに一人でよく来たな』とお父さんの所に連れて行ってくれた。お父さんは元気だったけど、寒いから毛布と着替えが欲しいと言っていたよ」との報告。とにかく父の様子が分かったので皆ひと安心した。

翌日、兄は毛布と衣類を詰めた大きなリュックサックを背に、再び海岸の保安署に向かった。取りあえず父の安否は分かったし、私たちの居所も父に知らせたので、今後どうなるか不安ながらも父の帰りを待つしかなかった。

十日くらい経つただろうか。ある日の夕暮れ、突然父が帰って来た。髪も髭もぼうぼうで、別人のようだった。「みんな無事で良かった！」と父。「あなただけ別の部屋に連れて行かれたから、どんなに心配だったか。あの後もひどい仕打ちに遭つたの？」と尋ねる母に、父は一部始終を語った。

父が連れて行かれたのは保安署長室だった。中年の署長は部下を去らせると、父に椅子と煙草を勧めながら、こう話し出した。「小林さん、私はあなたがこの国のために随分協力してくださったことに對して、感謝しています。できれば皆さんを無事に日本に帰してあげたいと思っています。しかし現実にはソ連軍の支配下にあり、脱走者を発見したら捕らえて連れ戻すように命令されています。しかも部下の多くは日本人に對して反感を持っているので、見付けたら捕らえないわけにはいかないのです。立場上しばらく留置所にいてもいますが、今度逃げるときはどうかもうまくやってください」。晩飯には玉子丼が出されたそうだ。日本政府の思惑はさておき、海州のためにと懸命に働いてきた父のことを認める人が、こんな所にいたことは誠に幸運であった。

こうして、一回目の脱出は見事に失敗に終わったが、今までの失敗者は身ぐるみはがれてすべて没収されたというから、私たちはまだいい方であったと言える。

数日後、一家そろって脱出し、空き家になっていた家が見付かり、そこに移った。鍋釜はもちろん、食器、布団類までそっくり置いてある。出戻り家族には、誠に都合であった。

その後、父は頻繁に日本人会に足を運んだ。引揚げに関するソ連軍司令部からの通達、少しでも生

活の足しになる労務の手配、海州に残っている日本人たちの消息などのすべての情報は、日本人会に集まってくるからだ。満州国境の方から逃げて来た人たちが途中でかかった発疹チフスに、海州で世話をした人までも感染して多くの死者が出たとか、乞食をしている日本人の奥さんがいたとか、同胞の脱走をソ連軍に密告する日本人が出たとか、いろいろな話を私たち家族は父から聞いた。

母は、衣類に縫い込んで隠し通したお金を少しずつ大事に使い、家族の健康を懸命に守った。物を値切つて買うことを初めて覚えたと言は言う。

そうするうちに朝鮮の冬は寒さを増し、昭和二十一年を迎えた。コンクリート敷きの庭に夜間水を撒^まいておくと、朝はカチカチに凍っている。私たち兄弟は、スケートの歯のような金具をつけた箱櫓^{はこぐる}を父に作ってもらい、その上で滑って遊んだ。とても面白かったことを記憶している。

四 第二次脱出

そのころのある日、父の知人で海州港施設の重役兼府会議員を務めていたO氏が訪ねて来た。彼は例の港の保安署長とも知り合いで、署長のことを信頼できる人間だと評価していた。O氏はその署長からのメッセージを伝えた。「小林さんのことはずっと気に掛けています。そのうち私の手配で国境まで送り届けるつもりですが、一族につき一万円かかります。高いと思うでしょうが、国境までの部落の責任者を全部買収するためには必要なのです。詳細はOさんを通じて相談しましょう」という内容だったが、今は厳冬、下手をすれば途中で凍死してしまう。寒さの緩む三月まで待つことになっ

た。

脱出経費一万円を払えば、持ち金の残りはわずか。三月までの食費を得るため、母は残った着物類を、紹介されたソ連軍将校の家に売りに行った。まだしつけ糸のかかった水仙の裾模様様の訪問着に将校夫人は大喜びで、ソ連紙幣をどつきりと母に渡したが、初めて見るお札の価値がどのくらいか母には分からない。後日、市場に行つて初めて、日本円の方が喜ばれソ連紙幣の信用が低いことを知つたと言う。一張羅いっちやろの訪問着が、米何升分にしかならなかつたのである。今なら数十万円はするはずなのに。

そして水温む三月となつた。とはいえ、夜間はまだ冷え込み、氷も張る季節だ。

昭和二十一年三月九日深夜。保安署長の段取りに従つて、私たちは暗やみの中を待ち合わせ場所の朝鮮人の家へと急いだ。前回同様、母の背中には赤ん坊、みんなの背中にはリュックサック、肩には鞆、手にもできるだけの荷物を提げて、人目に付かぬよう明かりを避け忍ぶように歩いた。

船に乗つてしまえば安心なのだが、それまでに見付かれば前回と同じことになってしまうのだ。東の空が明るくなり始めたころ、目的の一軒家にたどり着くと、既にかなりの人数が集まっていた。O氏と署長の手配に応じた人たちであろう。そこで夜まで待ち、船に乗る手はずであつたが、昼ごろに案内人が駆け込んで来た。手配した船が発見され、怪しまれて調べられているので、行動を変更し、牛車で国境を越えることにしようのだ。

暗くなるのを待つて、一同は牛車の待つ海岸へと出発した。見付かるのを恐れてか、案内人は急がせに急がせた。大人たちが大股でどんどん歩くから、私たち九歳と七歳の兄弟にすれば、ほとんど小走りのマラソンである。

息を切らせて必死で大人たちについて行く途中で、私たちは父と母と一緒にいないことに気付いた。母は背中に赤ん坊、大きなリュックサックを背負った父は五歳の弟の手を引いているから、次第に遅れてしまったのだろう。海岸に着き荷物を積み込んで出発という段になっても、母は追いついて来ない。心配する私たちに案内人は、あとから来るから大丈夫だと出発を急ぎ、牛の尻を叩いた。荷物と一緒に牛車に乗せられて国境への道を進む途中、何度も振り返って後ろの闇に目を凝らしたが、父と母の姿は現れない。そのうち、いつしか疲れた私は眠り込んでしまった。明け方近く、一行は山の中の部落で食事がありついた。朝鮮人の家で出された、真鍮しんちゆうの皿に盛られた真っ白く輝くようなご飯のうまさを、今も私は忘れない。きつとキムチも出されたのだろうが覚えていない。その日一行は、どこがそうであつたのかは知らないが、南北国境の三十八度線を越え、南朝鮮の初めての町、青丹に着いた。

ソ連兵とは違ってどこかスマートな感じの米兵たちがいる駅で、私たちは屋根のない貨物列車に詰め込まれて南へと出発した。途中で乗り換えのため下車した開城では、米兵の手で真っ白い消毒の粉DDTを頭から浴びせられた。その後、何日何時間かかったのか覚えていないが、引揚者で満杯の貨

車は京城を經由して、日本への窓口釜山へ到着した。駅前にある収容所では、次々に列車で運ばれて来る引揚者の食事の世話や、乗船手続きが行われている。親にはぐれて不安いっぱいの私たちに、海州（北朝鮮南西部の都市）から一緒に来たかと面倒を見てくれていたXさんが言った。「私たちはここから船に乗って内地に帰るけど、君たちはここでお父さんたちを待ちなさい。ここにいればきつと会えるから大丈夫だよ」。そうするしかなかった。知らない人たちの中に残り残された私たちは本当に心細かった。

食堂で食事をもらう以外することもなく、駅で列車が着くたびに二人で両親の姿を探した。二、三日のことだったのであるが、私には限りなく長い時間に感じられた。

その日私は気分がすぐれず、収容所の片隅で横になつてぼんやりしていた。そのとき、いつものように駅に行っていた兄が、大声で叫びながら駆け込んで来た。「正明、来たぞ！ お父さんもお母さんもみんな今着いたぞ！」、兄の後ろに父と母、そして幼い弟の姿も見えた。母の記憶によると、そのとき私は疲れたようにのろのろと起きあがったそうだ。

母の話では、牛車に乗るため暗闇の中を急いだあの夜、五歳の弟が小便をしている間に遅れて、道に迷ってしまったのだという。そのため、案内人付の私たちのようにうまくいかず、途中で追いはぎのような連中に金を奪われるなど散々な目に遭ったが、とにかく命からがら青丹にたどり着いた。その後、列車に乗ってからトラブル続きで到着が遅れ、私たちのことを思うと気が気ではなかったそ

うだ。

ともかくにも三月十五日、私たちは家族そろって引揚船に乗り、内地へと出航することができた。船の名前は確か「コウサイ丸」。貨物船を引揚者用に改造したもので、狭い船内はぎゅうぎゅう詰め。家族六人で畳一枚分くらいのスペースしかないので、座ったまま膝を抱えて眠るしかないような状態であった。食事は、麦が九割以上の握り飯が一人一日一個。しかし一昼夜後には内地に着けるのだと思ひ、皆我慢していた。

翌三月十六日博多湾到着、引揚者全員の検疫も終わったが、船は停止したまま動かない。疑似天然痘患者が発見されたので、当分の間上陸が許可されないというのだ。狭い空間と一日一個の握り飯、過酷な条件の中で皆我慢して過ごしているが、子供はじつとしておれない。私と兄は船内をうろついて遊ぶうちに、もと兵隊だったという機関士たちと仲良くなって、彼らのご飯を分けてもらえるようになった。大きなおこげのお握りをもらって母の所にそと持って行くと、栄養不足で母乳が出ず悩んでいた母は、これで赤ん坊のため乳が出ると喜んでくれた。また船員たちの部屋で一緒に寝るようになったので、父と母はようやく横になって眠ることができるようになった。

そして十日後の三月二十七日、やっと私たちは博多に上陸することになった。ほとんど無一文、裸同然の帰国だが、家族そろって日本の大地を踏むことができた。焼け野原になった博多の町を見回すと、バラック小屋の脇の小さな畑に空豆が植えてあった。二尺ほどに延びた空豆は勢いよく天を仰ぎ、

薄紫の花を咲かせていた。内地はもう春だった。

五 引揚げ後のこと

母の記録をベースにしたこともあって、この労苦記録の題名を、「母よ！ あなたは強かった」としたが、母が本当に強かったのは引き揚げてからである。

博多に上陸した後、我が家族は母方の郷里、鳥取に取りあえず帰ったが、そこから安住の地を求めて山口、高知と転々と動いた。しかし父の働くべき適当な場所は見付からなかった。

その間、母は農家の手伝いをして食糧を手に入れたり、真冬の海辺で貝を掘ったり、川に行つては魚やカニなどを捕ったりして、食べ盛り、育ち盛りの子供たちが栄養不足にならないように奮闘した。高知では母の兄弟たちと開拓部落に入り、手に豆を作つて鉋くわを振るい、よろめきながら肥桶こえがけを担いでいた。私たち子供も遊んではおれずに、一緒になって働いた。

昭和二十五年ごろ、縁者の紹介で母は父と共に、高知の山奥の分教場の教師となったが、村人たちの厚い信頼と尊敬を受けた両親は、村の子供たちの名付け親になったり、新しい橋が完成すると橋柱へ橋名の揮かぎょうをしたりした。

私たち五人の兄弟も地元の高校を卒業すると、次々に上京して大学を終え、それぞれに就職し自立した。質素な暮らしの中から学費を送り続けた父母は、昭和四十一年の春、惜しまれながら分教場を去り、私たちの後を追つて上京し、既に結婚していた兄一家と同居した。

こうして私たち一家は、全員が相模原周辺に住むようになり、北朝鮮の海州以来久しぶりでみんなそろって、豊かで平和な暮らしを送るようになった。

母が、八十三歳でこの世を去って十年、父が八十九歳で亡くなって、もう七年になる。

この記録をまとめるにあたり、改めて父母の戦前、戦中、そして戦後の苦勞を思い、感謝の念を新たにした次第である。